

## 2024 年度支援展覧会選考結果

2024 年 8 月 24 日(土曜)、小川知子(大阪中之島美術館研究副主幹)、実方葉子(泉屋博古館学芸部長)、吉岡洋(京都芸術大学文明哲学研究所教授)、岩城見一(京都大学名誉教授、元京都国立近代美術館館長、弊財団代表理事)、井面信行(近畿大学名誉教授、弊財団理事)を選考委員として、2024 年度支援展覧会選考委員会が開かれました。まず、委員の互選により、吉岡洋委員が委員長に選ばれ、次いで、応募のあった4件の展覧会について審議が行われ、その結果、1件の展覧会に対して、支援を行うことが決定されました。なお、審査委員として、当初、中谷伸生(関西大学名誉教授、弊財団理事)が予定されていましたが、病氣療養中のため、井面理事が代行することになりました。ご理解賜れば幸いです。また、委員会終了後、来年度の公募に向けて、応募条件や支援件数、募集期間、広報の仕方などについて、議論が行われたことを記しておきます。

### 選評

委員長 吉岡洋

応募件数は4件であり、いずれも視覚文化の魅力を訴える興味深い内容であったが、2026年度内の開催という応募条件、またコレクション等を中心とする展覧会という観点から見て、本支援事業の趣旨に最もよく合致するものとして以下の企画が採択された。

■展覧会名:京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展「無限のよさ」に出会う—絵になる瞬間の身体性」、会場:京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、会期:2026年10月31日(土)~12月20日(日)、企画:藤田瑞穂(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(アクア)チーフキュレーター/プログラムディレクター)

【支援金額】100万円

【選評】京都府画学校としての開学以来、140年に及ぶ歴史を通じて現京都市立芸術大学に蓄積されてきた日本画教育に関する膨大な資料を2年間に渡って研究し、その成果を踏まえて開催される、美術史的価値の高い展示内容である。近代から現代に至る日本画の変遷を教育という観点から浮き彫りにすることで、日本画とはそもそも何かという問いに、新たな角度から光を投げかけるものとなるだろう。展示そのものに加えて図録の制作も計画されており、美術研究としての成果も期待される。